



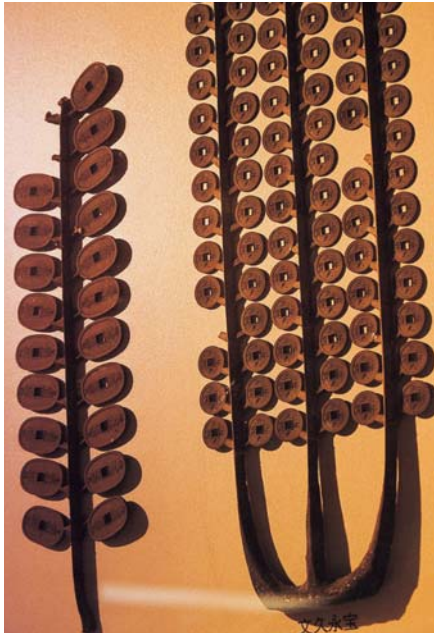
日本銀行金融研究所貨幣博物館

日本銀行金融研究所貨幣博物館では、数多くの所蔵品の中から厳選したコレクションを展示しています。その規模はわが国最大、とりわけ東洋貨幣に関しては、世界的にも例を見ない充実振りとの評価を得ています。貨紙幣の変遷には、その時代の世相が映し出されています。人と貨幣の関わりの歴史をその目でご覧になってみませんか。

昭和十九年三月、日本銀行の第一六代総裁に渋澤敬三が就任した。その年の六月十五日には、連合軍がサイパン島に上陸し、本土への空襲も間近いと予想された。日銀では、戦災を受けた場合の金融機関の預貯金、保険会社の保険金の支払い保証



この美しい尾張徳川家伝来の量目100匁の分銅型金塊は、家康の遺金に含まれていた可能性が高いとされているが、いつ、誰が作ったのかは解明されておらず、「太閤分銅金」とも呼ばれる金塊の謎に知的な想像をかき立てられる（上）。



鋳型から取り出したままの姿が、枝に葉が茂っているような形に見えることから「枝銭」と呼ばれる。枝銭から1枚1枚折り取って、銭の側面や孔の中を仕上げていく当時の鑄造過程がうかがい知ることができる（上）。銭は1枚ずつ使われるほか、100枚ずつ麻縄やわら縄などにさしても使われた（『銭繩』）。実際には96枚の縄が100文として通用しており、4文は手数料であったという説もあり、貨幣流通の具体的な姿が浮かんでくる（下）。

を決定。一方、軍部の圧力のもとで、無制限に赤字国債を引き受け軍需融資の資金供給を行わざるをえなくなる。

これらが戦後に大インフレを招く原因となり、渋澤は批判を受けることになるのだが、その空襲への不安が高まっていた頃、一人のコレクターが日銀を訪れた。コレクションが戦災などで散逸するのではないかと心配し、対策の相談に来たという。以前に渋澤が見学してその充実ぶりに驚愕した東洋貨幣研究所「錢幣館」の館主、田中啓文（けいぶん）であった。

錢幣館は、田中が五〇年にわたって家業の製革業で得た財力を注ぎこんで収集してきた貨幣や金融に関わ

るコレクションを保存、展示していた個人博物館だった。

そのコレクションは一〇万点を超え、貨幣そのものはもちろん、古代以来の貨幣の鑄造のための道具、古銭に関する文献や絵図、千両箱、旅行のときに金を隠して持てるように工夫した銭刀、銭罫などにいたるまで、金銭に関わるさまざまな資料が広く深く集められていた。田中は、そのコレクションをもとに研究を重ね、また研究のための人材を育ててもいた。

田中が日銀に相談にきたのは、先代の総裁、結城豊太郎と交際があったからで、コレクションの処置についても既に何度か話し合っていた

という。いわばかねての懸案を新総裁が引き継いだことになるが、渋澤には錢幣館コレクションの価値やその散逸への恐れが誰よりも実感できた。

渋澤自身が、動植物の標本、化石、民具や郷土玩具などを収集してきた私設博物館「アチック・ミュージアム」の資料、また実業史博物館を設立すべく集めてきた江戸末から明治にかけての社会経済史関係の資料の保全に悩んでいたところだったからである。

錢幣館のかけがえのないコレクションを散逸させてはならぬとの思いから、渋澤はコレクションを研究員もろとも日銀で受け入れ保存と整理、研究を継続しようと提案する。承けて田中は日銀にコレクションを譲ることにした。日銀内に新設した貨幣標本室へすべてを移送するには三カ月を要したという。

昭和十九年という厳しい時代にあつて即座にこのような判断ができたのは、渋澤ならではのことだっただろう。そのような状況下であったからこそ急がねばならなくもあつたのだが、錢幣館の学術的な価値を理解



波澤敬三は、錢幣館コレクションについて、その圧倒的な量、質、識見は無論、貨幣に限らず立体的かつ緻密に網羅されていることに驚嘆した、と書き記している。波澤はこの貴重な文化財を中央銀行が保管するのは社会に対する当然の責任と考え、博物館で広く公開する計画を当初から持っていたという。

し、またそうした価値を尊重する生き方をしてきた人物でなければ、できることではなかった。敗戦後にGHQから接収されそうになったときも、このコレクションが日銀にあるべき意義を主張し守り抜いた。波澤は後に「僕は日銀総裁として何もしなかったが、田中さんのコレクションを譲り受け保存したことだけは、良いことをしたと思っっている」と語っていたという。

その錢幣館コレクションを基礎として生まれたのが、貨幣博物館である。昭和五十七年に日本銀行創立一〇〇周年を記念して金融研究所内に設置され、昭和六十年十一月に開館した。ここでは、数多くの資料の中から厳選された貴重な史料を眺めながら、貨幣の誕生から現在にいたるまでの歴史をたどることができ



手本金（上）と極印（下）。規定品位をもって鑄造された手本金は、金座内に備え付け、鑑定時に照合したものと考えられる。合格すれば極印が打刻された。

貨幣の役を果たしていたという米や鎌などに始まり、中国はじめ世界各国の古代貨幣、中国に学んで日本で初めて作られたとされる富本銭（レプリカ）や、和同開珎。どんどん悪化してゆく皇朝銭。

たとえ知識としては知っていたものであっても、遠い昔の人々が実際に手に触れていた実物を見ると、感慨を覚えずにはいられない。初めて知る驚きと同じく、それも博物館の

徳川時代の小判の時代ことの変容ぶりは、金含有量のグラフがあわせて展示されている。質が落ちると外見も貧しくなるのかと思ったら、巧みな技術で表面は変わらないように作られているという。技術的にはむしろ高度なものだったわけだ。

五〇両、一〇〇両といった単位で紙で包装されたまま流通していた包み金（今でいえば封帯のついたままの札束）や、一文銭に紐を通して一

楽しさだろう。

戦国時代の武田氏ゆかりの甲州金、豊臣秀吉が後藤家に命じて作らせた天正長大判、尾張徳川家に伝わっていたという輝きを放つ四種類の分銅金……戦国武将、天下人たちの力の源であり象徴、そして日本経済史の画期を伝える遺産の数々がそこにある。

INFORMATION

日本銀行金融研究所貨幣博物館見学

●所在地

東京都中央区日本橋本石町1-3-1（日本銀行分館内）

●開館時間 9:30～16:30（入館は16:00まで）

●休館日

月曜日、祝日（ただし土日と重なる場合は開館）、振替休日および年末年始（12月29日～1月4日）

（注）このほか展示入れ替え等のための臨時休館日あり。

●入館料 無料

●展示解説

毎週火・木曜日の13:30から約1時間、貨幣博物館職員が常設展「日本貨幣史」を中心とする展示解説を実施（事前予約不要。13:30までに博物館2階ロビーに集合）。

●団体見学

20名以上の団体見学を希望される場合は、あらかじめ電話等でご連絡ください。原則として、見学希望日3カ月前から受付開始（学校教育関連の団体等については、4カ月前から）。

申込先：日本銀行金融研究所貨幣博物館（団体見学受付）
予約受付直通：03-3277-3037

●その他

駐車場は団体バス専用（要予約）

詳しくはホームページを

http://www.imes.boj.or.jp/cm/htmls/museum_navi.htm

古代の貨幣から大判・小判、最初の日本銀行券「大黒札」から現在の紙幣まで、わが国の貨幣の歴史が一目でわかるように時系列で展示されている。



〇〇文とした錢^{ぜに}繒^{そう}などには、大名、豪商、庶民の暮らしのさまざまな場面が空想させられる。金貨、銀貨、

錢貨が併用された「三貨制度」と呼ばれる徳川時代の貨幣制度についても、実物の貨幣とともに紹介されている。制度は複雑でわかりにくくても、展示を見ていると、経済行為にまつわる勢いのようなものが感じられてくるのが面白い。

また鑄造されたままの枝錢、貨幣を研いだ砥石、鑄造過程を描いた「金座絵巻」などの貨幣鑄造に関する資料、あるいは両替商の天秤や看板などが

らは、金融の現場を支えた職人や商人の活力が伝わってくるようだ。錢幣館コレクションの価値をより高めているのは、このような貨幣以外の周辺資料の充実だという。経済史、金融史、また風俗史のまたとない資料なのである。

近代の展示になると、紙幣の図柄の変遷が面白い。描かれるシンボルには時代ごとの意識が反映されている。時代を最も映しているのは、昭和二年の金融恐慌のときに緊急発行された二百円札で、裏が白紙のまま。こんな札を使ったら非常事態と感ぜないではいられなかっただろう。

ところで子供に人気なのは、実際に触れてみて重さを感じることで、きる分銅金や大判のレプリカ展示、そして世界各国の現行紙幣を展示したコーナーだという。こんなに情報にあふれた時代でも、世界のいろいろなお金を見てワクワクし、分銅金に触れてドキドキするとは、今でも子供は子供らしいものなのだ。あと、ちよつと嬉しく思ったりしつつ、大人だって分銅金に触れてみないではいられない。

このユニークな博物館があるのは

錢幣館コレクションがあったからであり、一人のコレクターが莫大な財を傾けた五〇年の営為が日本銀行に受け継がれたのは、絶妙なタイミングで渋澤敬三が総裁となっていたからである。その奇縁を思うと、この博物館の存在自体が喜ばしいものと感じられてくる。

世界各国のさまざまな紙幣を見ることが出来る。

